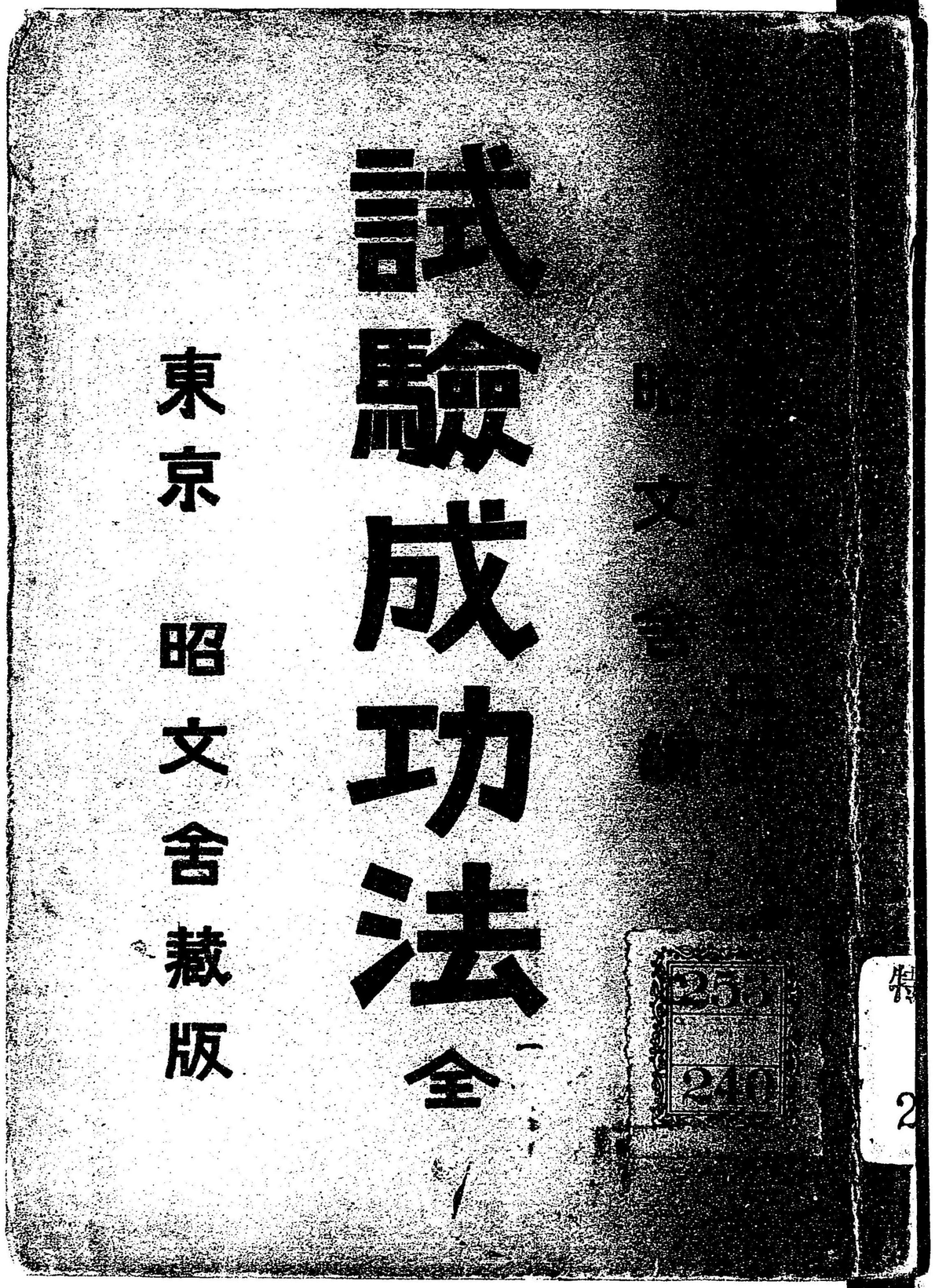

049469-000-1

特62-275

試験成功法

瀋陽／述

M39

BEM-0094

特62
275

成功法全

法學士 潘陽先生口述
昭文舍編

東京 昭文舍藏版

明治
39 9 20
内交

緒言

瀋陽先生は學校生活に於ける成功者のチヤンピオンとして、同輩の敬歎する所なり。舍主一日就て其秘訣を問ふ。先生乃ち諄々として說く。本書は其詳細かる筆錄なり。受驗の方法に關する著書は他に坊間に見ざるに非ず。然れども舍主は玆に瀋陽先生の口述に基く本書が、全く普通の俗書と其撰

を異にし、根本的實際的に受驗の用意を教ふるに於て、世の學生諸氏に眞實の利益を供する者なることを宣明せざるを得ず。

上は帝國大學の學生諸氏より下は中小學の生徒諸君に至るまで、願くは本書を繙ざて試驗成功の秘訣を學べ。殊に、各種學校の入學試驗に應ぜんと欲する者、又は高等普通の文官試驗、或は判檢事、辯護士、各種學校教員の撿定試驗に應ぜんこと欲する諸君には本書は實に至大の便益を與ふべし。若し夫れ新に高等の諸學校に入れる諸君の如き、亦本書により今後研學の方針を立するの便を得ん。

本書は試驗成功術と題すと雖とも、實は修學の目的方法等より論を起して、根本的の注告を學生諸氏に與ふるの微意に出づ。故

に社主は本書の一讀を、獨り學生諸氏に望むの外、又子弟の前途を焦慮せらるゝ幾多の父兄、教育家の一讀をも切に希望する者なり。

明治三十九年八月廿五日

昭文舍主識す

試驗改良法

加何にせば試驗に旨く成効するてが出來るか。是れ實に學生に取つて重大なる問題である。併し予輩は元來斯かる問題を說くてを欲せぬものである。何となれば、現時の學生諸君の中には、既に餘りに試驗の事に汲々として、チツトモ餘裕がなく、從つて元氣も活氣もなく、精神的に餘程悄沈し切

つて居るものが頗る多いからである、

併し斯くも試驗の事を心配して居るに拘らず、實際心配するほどに試驗に成効せぬが多いのは、予の實に意外とする所である。何故であらう。

今や學生に取つて大切なる所の試驗期に近さつゝある。ふだん能く出來る人も能く出來ぬ人も、ソロ〳〵頭を痛めつゝあるであらう。本人は固より心配して居ることであり、又親たちも大に心配して居ることであらう。一體試驗に成功するには二つの人の一頭を得んが爲めに此

一篇を草するのである。

扨て試驗に成功するには二つの要素が必要である。一つは天品ノ優秀ナルコトデ、一つは工夫である。天品の能力は固より各人に生れつき備はる所の、定まれものであるから、今更之は動かすことは出來ない。只此天品の能力を如何に活用すべきかの點に至つては、吾々大に工夫を凝して、少しでも立派なものにしなければならぬ。

凡そ學校の課目は、平凡の能力の人も、之に堪

え得るを程度として配列して居るものであるから、之に落第するといふのは抑も間違つて居るのである。若し之に落第するものがあると云ふならば、ソレハ必ず相當の工夫を積まぬからだと思はれる。實に工夫といふことが大切なのである。如何に天品の能い人でも此工夫を欲くときは恰かも磨ずば瓦礫も光を積む」

が如しといふ、天に工夫を廻らすの意である。匠とかに骨折らねば成功せぬ。軍人が忠勇で武器が精鋭たと云ふのみにては今の戰爭には勝てぬ、大に戰略をこらすの必要がある。學問も亦同樣である。商人が金儲けに苦心し、參謀が軍略に焦慮するとと、同樣の經營慘憺の工夫を積まずしては、ホンの學者にはなれるものではない。腐儒には愚

者もなれるだらうが、今日の活學は才氣爛熳、拔目なき利怜者でなければ修め得られるものではない。故に試驗に成功せんと思ふ者は、勉強の方法に、氣のきいた、利潑なやり方を工夫せねばならないのである。

試驗と云ふは、モト或る問題につき能く理解して居るか否かを試めす爲めに行ふものであるから、受驗者より云へば、或る學問を能く理解して、其解得したる所を巧に發表すればソレデ宜いのである。

即ち先づ受働的に或る說明を理解し　次で自働的に其解得したる所を發表するを以て十分とする。併し如何にして能く理解すべきか。又如何にして能く發表すべきか。之れ工夫を要する點である。

如何にして能く理解すべきか。此問題に答ふるものは試驗術に於ける理解の原則である、讀書法と云ふも略ぼ同一である。如何にして能く發表すべきか、此問題に答ふるものは試驗術に於ける發

表の原則である。答案の書き方と云ふても宜い。
予は之より自分の經驗に基き、此二原則を述べて
見やう。

理解の原則と發表の原則とを述ぶるに先ち、先
づ全體に通ずる心得を一言述ぶるの必要がある。
以下述ぶるが如き諸原則は只一應之を讀んだ斗り
では、何の役にも立たぬものである。之を痛切に
心に置くことが必要である。牛素之等の原則を
意に留めて更に一層の工

夫を積むことが必要である。即ち牛素試驗を受く
る時の積りにて、此處は斯う彼處は斯うと工夫す
るのが必要である。

次に之等の原則は、受驗の際に自由に活用し得
ねばならぬ。平常工夫を積まざれば、イザといふ
とき實際に活用し得ざるものである。無暗に試驗
を恐がつてもいけぬ。即ち試驗の原則などを能く
精察に工夫せぬ人は、一二度之を聞いたのみでは、
心に未だ確信が出來ぬのから、無暗に恐れるといふ

點のないでもあるまい。要するに大膽に度胸が据つて居なければならぬ。

最も根本的なる條件としては、**身體及ビ精神ノ健全平調**を保たねばならぬ。之は平常より心掛けて試驗の際には最も愼まねばならぬものである。

急に勉強が忙しくなつたからとて睡眠時間を減じたり、食事を不規則にしたするのは以ての外である。平素よりも一層嚴格に衛生上の原則を遵奉せねばならぬ。又精神の平調を素す樣な卑猥な小說を讀むとか、又は夕食後散步などに出で、一寸氣保養など、云つて、寄席などに這入るのも宜しくないと思ふ。少しにても身體の健康を減じ、又少しにても精神の專念を妨ぐるものは、斷じて之を斥ぐるだけの心掛が必要である。酒と煙草との如きは此兩方に大毒であらう。

（二）

之より**理解ノ原則**を說明するのであるが、先づ能く理解するには敎科書の讀み方に注意せねば

らぬのだが、學校に依つては、教科書を用ゐず、教師が口述するのを筆記させる場合も少くない。多くの法律學校や、又は大學、若くは高等の諸專門學校は、大抵筆記をやるのである。然らば理解の原則は單に讀み方の原則ばかりでは足りないので、自ら又外に筆記ノ原則をも說明せでは不十分である。

然らば教師の口述する所を、如何に筆記すれば試驗成功術の主意に叶ふか。今多くの書生の筆記

を見るに、實に亂暴極るものである。最も教師の口述が早くて、總て書き切れぬから、從つて字も粗末になるといふ點もあらうけれども、あんあり亂暴で、甚しきは、後で自分で讀んでも、何んだか分らないのがある。法科大學などでも、他人が讀んで、兎も角も分る樣なノートを作るものは、百人に一人といふて居る。コンな有樣では、後に讀むとき骨が折れて堪るものでない。總てノートは、後に讀んで覺へんとするときに、

便利なる樣に、筆記しておかねばならぬ。早く云へば、奇麗にノートを作つて置かねばならぬ。

ノートを、奇麗に、後に讀んで覺へるとき氣持よく讀める樣に、作るには、第一平素から字を器用に、即ち早く奇麗に書き得る樣に、練習して置くのが必要である。此點から云へば、學生がふだん習字を輕蔑するのは大なる誤りである。又今の學校に於ける習字課の教へ方も、少しく間違つて居ると思ふ。筆鋒だとか何んだとかいふて、文字

を一種の美術としてのみ習はせんとするのは、其當を得ないと思はれる。無論之も必要だが、モツト必要なのは、字を器用に早く書くてを習はしむるてだ。習字課の教授の目的は、細字速寫を第一とすることは、少くとも二十世紀の活世界に要用なる活人物を作るに必要なることゝ思ふ、要するに試驗に成功せんと思ふ者は、先づ以てノートを上手に取らねばならぬ。ノートを上手に取るには、細字速寫に妙を得なければならぬ。猶ほ細字速寫

の必要は、後に發表の原則の說明の時にも出で來るとである。

以上は極く根本的のことである。差當つての問題としては、自分は日本筆で日本紙に書くこと、、西洋ペンで西洋紙に書くこと、、孰れが得意であるかを定めねばならぬ。其得意な流儀に從つて、ノートを少しでも奇麗に作るのが、ソレダケ得策である。

西洋流にするか日本流にするか、定まつた所で、今度は西洋流ならば紙の片面にのみ書き、他の片面には見出しを書くとか、又日本流ならば天地左右にどれだけの餘白を殘すとか云ふことに、一應の苦心をせねばならぬ。

又後に讀んで覺へる時の爲めとしては、出來るだけ事柄の異る毎に行を改むるとか、云つてある事柄の重要の度合に依つて文字の大小を別つとか、又は肝要な文句は一字上げて大文字で墨黑々と書き、其說明になる樣な文句は一字下げて小文

字で書くとかの工夫も必要であらう。新聞などにて二號活字やら五號活字やら六號活字などを使ひ分けるのは、大に予輩の參考となるのである。

要するに、筆記の原則としては、紙を惜まず、筆を惜まず、只後に讀むとき如何にすれば便利だらうかといふことを、專心一意として、銘々能く〳〵工夫するのが第一の要點である。

(三)

以上を以て簡單ながら理解の原則中の筆記の原則を一ト通り說明した、次は讀むことの原則である。**讀ムコトノ原則**の第一義は、最も適切に要點を握むことである。教師の述べた所又は本に書いてある所の根本の大眼目は何處に在るかを、明了に摑むことが必要である。如何にせば要點を摑むことが出來るか。只漫然と讀んだばかりでは、何遍繰り返しても駄目である。

吾々は先づ斯いふことを知らねばならぬ。試驗と云ふものは、教師が十時間掛つて口述したる所

を、矢張り十時間かゝつて答へさするものでない。本に十枚書いてあることをば、十枚の答案で答へられるのを望むものでない。教師が十時間を費して口述した所を、吾々は一時間で答へねばならぬ。本に十枚の長さに亘りて書いてある所をも、吾々は一枚若くは二枚で答へねばならぬ。故に吾々は、十時間の口述を一時間の答案に約めねばならぬ、十枚の記事を一枚に縮めて見ねばならぬ。千年の歴史を一冊の書巻に網羅して而かも遺憾なからしむるのが、中々困難の事である如く、五十日の長旅の話をさも見るが如く、一二三時間の談話の中に活躍せしむることの中々困難事たる如く、十時間の口述、十枚の記事を、一時間又は一枚の答案に、巧に縮め収むることは、決して容易の事ではない、之には要點と要點に非るものとを鑑別するの見識が無くては成らぬ。蒭麥を辨別取捨するの正當なる判斷力を有して居らねばならぬ。此點は最も學生諸君の頭を惱まして工夫し給ふべき要點であ

る。

我輩の舊學友などに、試驗前ノートを何十回となく讀み盡し、記載事項の初めより終りまで、何處を聞いても能く知り拔いて居る人で、能く試驗に落第する人がある。多くの人は、悉く之を不思議に思つて居るが、予輩より見れば何も不思議はない。斯かる人は、勉強に忠實ではあるが、惜しいかな玉石を識別する見識がない。何も彼も知つて居るけれども、要點のみを簡明に覺え込むとい

ふ能力が乏しいのである。斯かる人は、十時間の口述は十時間かゝらなければ答が出來ぬ人である。十枚の記事は十枚の答案でなければ答をなし得ぬ人である。百日の遊歷の旅行談は、百日かゝらねば話せぬ人である。度々落第するも無理はないではないか。

之に就ては、現今の語學（外國語にしろ、和漢文にしろ）の教授法に、大に責任があると思ふ。現今の語學の教授法は、實に斷片的であつて、達

觀的でない。一行一節を取り、此助動詞は彼の動詞と結ばるのだとか、此形容詞はどの名詞につくとか、この代名詞はどの名詞を代表するとか、一段一句の意味は誠に忠實に解明するけれども、扨て一月若くは一學期かゝりて漸く讀み了へたる一篇一章の全體の意味如何に至つては、更に了解して居ないのである。障子のことを知つて居るものはある、けれども家作り全體の事は更に達觀し得ぬのである。

全體の意味は、と尋ねらるれば、第一頁第一行より、コツ〳〵と讀み直さねば分らぬ。即ち百日巡歴の旅行談は、と問はるれば、第一日目の第一歩より、第二歩第三歩と歩を追はねば分らぬと云ふ樣な有樣である。コンナ風では、讀書は實に無益である。而して、現今の語學教授法は、實に斯かる斷片的讀書法になれしめて、更に達觀的教授に意を注がぬのは甚だ殘念である。

尤も、斷片的に一句一字の意義を正確に研究し

て行くのも必要ではある。併し之れのみでは不完全であるから、今後の語學教授は、別に亦極めて簡易な時文を教科書とし（和洋とも）生徒をして一章一節を讀み、直ちに其大要を述べしむるが如き方法をも、併せ實行せざれば、到底青年は助からぬのである。

かくの如く讀書法としては斷片的理解ではいけぬ、達觀的理解でなければならぬ。吾人は不幸にしてこの斷片的理解にのみ走るのである。而して此斷片的理解を事とせしむるに至つたに付ては、語學教授法も與つて大に力ある。而して我々は、早く此弊より脫せねばならぬ。速かに此弊より脫する者は、ソレだけ早く試驗の成功に一歩を進めたものである。

此弊を早く脫するの方法如何。之にも讀む物の種類を二つに分ちて予輩の實驗を語るの必要がある。

讀みもの、中には、否な少くとも吾人の學校に

て學ぶ課目の中には、論理的のものと記述的のものとの二種ある。前者は數學だとか法律學だとかの如く、或る一定の根本原理から割り出して理屈に理屈を疊み上げて行くやつで、後者は歴史だとか地理だとかの如く或事柄の其儘の列記である。而して前者は理で理を推すものだから一見甚だ六つかしい樣に思はるゝけれども、決してさうでない。理屈で以てチヤンと順序の立つて居るものだけに實は呑み込み易いものである。之に反して後者は格別の理屈もないから殆んど機械的に記憶するより外なく、從つて容易のやうにして實は輕んずるを得ざるものである。

記述的のものを理解するには、前申した「要點を約まんで覺へる」と云ふことが最も必要である。大部分記憶に依りて全體を能く了解し、始終一貫して脳中に之を明に藏めねばならぬ。此點に就ての練習に最も助けになるのは、友人四五人を以て一の組合を作り、毎週一二回位集會し、毎會講演擔

當者を定め、其人をして豫じめ或る記述的の本（歴史とか、傳記とか、風土誌とか、其他種々あらう）を熟讀せしめ、其大要を其席にて演述せしむるといふ仕組を作ることである。斯くて各人互に講演擔當者の述ぶる所に就き、能く其本の特質を紹介して繁簡其宜しきを得たりしや否や、其他演述の正否巧拙の點は如何、等を精密に批評し合ふたなら、定めし記述的の種類のものを理解する上に莫大の効能があらうと思ふのである。

次に論理的の物を了解するには如何の方法ありやと、云ふに、之れは先づ根本第一の原理を呑み込み順次第二第三と順序を追うて覺へることである。此順序をだに見落さずば論理的の物の理解は極めて雜作もないのである。只吳々も注意すべきは論理の連絡を失はぬことである、AとCとを知れるのみにてはいけぬ、其間にBあるありてAとCとを連絡し居るものなることをゆめ忘れてはならぬのである。故に論理的の物を讀むには、第一の

出立の原理より、第二第三の原理を發見し、其間に論理上の連絡を附くるといふことに在る。云ひ換ふれば、一篇中の要點を能く呑み込むにある。去れば細目に亘る注意は別として、記述的のものを讀むにしても、論理的のものを讀むにしても、其要點をつまんで更に自家腦中に其現に讀みつゝある所の、一篇の縮圖を作ることが必要である、といふことだけは共通の大眞理である。

要するに讀書法の要訣としては、早く一篇の要點を摑むと云ふことに在るが、併し如何にせば早く要點を摑むことが出來るか。試驗の際には、短時日の間に澤山の物を覺えねばならぬから、一刻も早く要點をつかむと云ふことが必要である。時間がタツプリあるならば面倒がないのだが、時間に制限があるのだから、早く要點をつかむのが必要である、この早くといふことが最も肝要なのである。

如何にすれば早く要點をつかむことが出來るか、

といふに、是は第一に、試驗の時讀んで早く分る樣に本を整理して置かねばならぬ。之れがために は、ふだん先づ本を熟讀して置かねばならぬ。試驗の時になりて俄にうろたへて讀んでは、氣が急いで居るために能く分らぬ。ふだん時間の十分に有る時に、ゆつくり熟讀すれば、能く要點の理解が出來るものである。故にふだん緩つくり熟讀玩味して要點を覺え込み、而して其覺え込んだる所に從つて、或は圈點をつけたり、或は見出しをつけたり、或は要點を拔き書きしたりすることが必要である。而して同じく圈點を附するにしても、事柄の肝要の度合に依りては●●●を用ひたり、◎◎◎を用ひたり、、、を用ひたり、△△△を用ひたりすることも工夫の一つである。又西洋流の橫書きならば圈點はつけられぬから、各行の下に赤線を引くがよい。この赤線の中でも——═══等種々に使ひ分けて、後日の注意を惹く樣に豫め心掛くべきである。

最も必要なのは「見出し」を附くることである。尤も近頃の本は、先づ之を編に分ち、次に之を章に分ち、更に之を節項に分つと云ふ風に、著者自ら見出しを附けて呉れるけれども、若し之が無かつたときは、讀む者自ら見出しを附くることが必要である。即ち一篇の全體を通讀して、先づ之を大きく幾段に分つべきかを考へ、之に依りて幾篇かに分類し、而して各篇に言うて居る所の要點をとりて各篇の名目とするのである。次に同じ理窟によりて各篇を幾つかの章に分ち、各章を更に節に分ち、之等の章節にも其要點により名目を附けるのである。斯くするときは、全體の要點が一目瞭然として能く理解せらるゝのみならず、又試驗の時大急ぎに卒讀しても、早く且つ正確に要點がつかめること疑ひはない。

要するに讀書は漫然として開き、漫然として閉づるのみでは不可である。種々苦心慘憺して、後に急いで讀む時にも早く理解の出來る樣に、豫め

用意せねばならぬのである。

序ながら附言して置くが、右の如き讀書法を行つて居るときは、實際中々捗取らぬものである。併し捗取らぬとは云へども、之れでなくては正確の理解は出來兼ぬる者である。故に試驗の爲めにのみでなく、萬事讀書は右の方法でやらねば無効であると思ふ。眞に、讀んで我ものと消化するには、捗取らぬながらも、右の細密なる方法に據らねばならぬ。

而して斯の方法によれば、讀書が捗取らぬ故に、斯かる讀書法は、多讀とは決して兩立せぬのである、多讀と兩立せぬとすれば、吾人は大に讀書の撰擇を愼まねばならぬ必要がある。ドーセ澤山の本が讀めぬものならば、願くはシツカリした、益の多い本を擇むべきである。之の事は試驗成功術とは直接の關係はないけれども、念のため一言して置くのである。

以上で以て「理解の原則」は簡單ながら說明し終

つた。之よりは「發表の原則」の説明に移らう。

(四)

以上を以て理解の原則を説明し了つたのであるが、如何に能く理解が出來ても、之を發表するに其宜しきを得ざれば、換言すれば、答案の書き方にして其宜しきを得ざれば、未だ以て試驗に成功することが出來ぬ。試驗に成功するには、固より能く覺え能く理解すると云ふことが第一義の必要であるには相違ないけれども、之を適當に發表して、試驗官をして成程此者は能く教へた所を理解して居る哩と納得せしむるだけの、手續を盡さなければ、折角理解し得た所も、認められずに終るのである。故に之れ迄說き來つた所の原則を活用して、理解し得たる所をば、更に如何にして發表すべきか。答案を如何に作るべきかを工夫せねばならぬ。是れ即ち**發表ノ原則**である。理解の原則と發表の原則と兩々相待つに非んば、試驗成功術は未だ十分とは云へぬ。

然らば如何にして發表すべきか。根本の大原則は斯うである。

自分の知識をば、一定の時間の制限内に於いて十分に表出し、而かも見る人（試驗官）をして出來るだけ（一）最も正しく（二）最も樂に（三）最も面白く讀める樣に答案を作ること。

尤も試驗には口頭試驗と筆記試驗との二つあるが、現時諸學校の試驗に於て口頭試驗を行ふ場合は極めて稀で、多くは皆筆記試驗であるから、茲には主として筆記試驗に付いてのみ說明を試みやう。

筆答の場合に於ける發表の大原則は、實は前段掲げたる所に盡きて居る。それを能く呑み込んで、之を自由自在に活用し、又平素此原則を腦中に入れて工夫の功を積み、自ら色々と想像を逞うして、斯う云ふ場合には斯う、あゝ云ふ場合にはアゝと、作戰計劃を目論んで居れば、完全な理想

的な答案を作ることが出來ること、決して疑がないのである。

併し之等の細かな工夫、周到な用意を怠りては、トテモ前掲の大原則を活用することが出來るものではない。前に云ふた所は只根本の大原則である。此大原則を土臺として、吾々は色々に工夫を凝らし、種々の場合を想像して、之に應ずべき細則を自ら作ることが必要である。之等の細則を待たずしては前の大原則は活きぬ。この大原則を活かして吾々の用を爲さしむるには更に之を土臺として詳細周到なる工夫を積み多くの細則を作りて、イザと云ふ場合の用意とせねばならぬ。

試みに上述の大原則より得たる吾人の細則を說明して見やうか。

(五)

第一には**定メラレタル時間ノ内ニ總ベテノ問題ニ答フルトイフコトガ必要**である。試驗には時間に制限がある。一課目の試驗は大抵一時間とか二

時間とかと限られてある。而して其一時間か二時間の中に答へらるべき問題は、凡そ三つとか四つとかあるのが普通である。此場合に予は、其一時間なり二時間なりのうちに、其總べての問題に洩なく答へよと勸めるのである。

能く人は「之れ〳〵の問題のすべてに答ふるには餘りに時間が少い」とか、又は「一時間や二時間では之れだけの問題に答へ切れるものでない」、などゝ呟くものがある。併し之れは多くは學生方の

誤解に出づることが多いと思ふ。尤も事實上、問題の數の割合に時間の少な過ぎると云ふことも無いではなからう。けれども多くの場合には、試驗官の方で、之だけの時間で之だけの問題に對し、之だけの時間で十分なるを認めて出すものである。否な時間に十分の餘裕ある樣にするのが現今の普通である。故に實際其一定の時間内に、凡ての問題に答ふることが出來る筈である。それにも拘らず、時間が少いなどゝ思ふのは、思ふに、かの「要點を摑む」

といふことが下手であるために、一つの問題を半枚乃至數行の短きを以て答へ得るといふ要訣を辨へぬ爲めではあるまいか。若し本に十枚に亘りて書いてある所が一問題となりし場合に、答案も亦十枚内外でなければならぬものであるならば、只の一問題と雖も、一時間や二時間で答へ切れぬだらう、けれども予輩が理解の原則に於いて説明した如く、能く要點をつまんで、十枚に書てある所を一枚に縮めるといふ技能を有つて居るならば、

五問題あらうが、十問題あらうが、チツトモ辟易するには足らないのである、夫の問題の多きを見て、時間の過少なるを呟く輩の如きは、恐くは此邊の秘訣を辨へぬより生じたる誤解だらうと思ふ。

右は實際時間が十分なのを、不足だと誤解して居る場合に就て一言したのであるが、次に若し誤解でも何でもなく、實際上問題が多過ぎて時間がドーシテも足りないと云ふ場合には如何するか、

數多き問題のうち答へられるだけを答へて、力に及ばぬ部分は答へずに置くべきか、又は多少精密の度を缺いても不十分ながらも總ての問題に答ふる方が宜いのであるか。予輩の主張より云へば寧ろ後者を安全とするのである、何故かと云へば、試驗官の方より云へば、彼は決して特定の時間内に答へ切れぬ程の多數の問題を出す筈のものでない。大丈大答へられると認めたればこそ出題したのである。然るに實際上答へ切ぬ程の多數の問題を出すに至つたのは、試驗官の惡戲でない限り、彼れの誤解に出でたものと見ねばならぬ。即ち實際答へ切れぬものを答へ得ると誤解したものと見ねばならぬ。併し誤解にもせよ、彼は十分答へられ得ると認めて出したのだから、試驗官の希望より云へば、總べての問題に答案を得るといふことに在るや言ふを待たない。然らば、吾々は多少不滿足にても、總べての問題に答ふるのが試驗官の望に添うのである。一定の時間内で、總ての問題

が答へられるだけの精密さを以て、各問題を解くのが安全であると思ふ。要するに、時間の不足を口實として、或問題に詳にして他の問題に疎なるが如きは、決して得策でない。但し數學の如く、答案を精粗二樣に書き分け難きものは、初めより順序を追うて解答を附し、其時間内にて答へ得たる處に至りて止めねばならぬ。之れは一つの例外の場合である。

（六）

次に**答案ハ最モ正確ニ書カヲバナラヌ。**獨り思想其者が正確であるを要するのみならず、文字も亦極めて正確でなければならない。之を答案の論理的條件といひて最も大なる注意を傾けねばならぬ點である。

正確なる答案、即ち論理的要件を充たす所の答案を作るに、第一必要であるのは自分の思想其者が正確であることである。理解の原則によりて覺

え込みたる所のものを、自己の胸中に於て能く消化し、能く組織立をなし、斯ういふ前提より斯う云う推論、ソレカラ彼アいふ結論といふ風に、首尾一貫して、一點の曖昧なき様に頭を整へて置かねばならぬ。思想の曖昧なのを文字の上よりゴマかさうとするなどは、以ての外の間違である。

次にこの正確なる思想をば、極めて正確なる文字に依りて表はすことが最も必要である。思想が正確でも文字が不正確では、決して正確なる答案は出來ぬ。文の正確を保つには、先づ或る個々の觀念を表はす所の文字を精選するの必要がある。云々〳〵の考をば何といふ文字で表はすべきかの工夫である。次に同一の觀念を、異りたる文字を以て表はし、又は異りたる觀念を同一の文字を以て表はすなどいふことをしてはならぬ。殊に愼まねばならぬのは誇張を愼むことである。吾人は多年支那流の文章を手本として文を稽古したものだが、支那流の文は、諸君の御承知の通り、極めて誇張

の甚しきものである。例へば「其數五十万稱百万」といふ様な風で始めから明白な嘘を云ふて居る。かゝる御手本による所の吾等の文章も、動もすれば、少し位曇つて居ても天に一點の雲なくと云ふたり、一寸した火事の形容を焔は天を焦すなどゝどうしても云ひたくなる。斯る誇張は極めて宜しくない。例へば科學上の原則を説明するときに、此原則に二三の例外あればとて、「其他例外少からず」など書くのは大に宜しくない、凡て物は皆正確に言はねばならぬ。例へば十五と廿七との和如何と問ふならば、正確に四十二と答ふべきである。決して、「凡そ四十」などゝ云つては爲らぬ。總じて「凡そ」とか「殆んど」とか、「の如し」とかいふ如き曖昧なる語は、答案には禁物である、法律研究の書生などに間違易いのは、「云々」といふことゝいふてとゝ、「云々することを要す」といふことゝを混同し、又は「看做す」と「推定す」とを混同することである。之等皆文字を正確にするといふ點に

大なる注意を拂ふことに依りて、始めて免るゝを得べき所である。

獨り文字ばかりではない、全體の文章も特に正確でなければならぬ。句と句との間にはハツキリ論理的の連絡がなくてはならぬ、語尾は特に明了なるを要する。

我輩近時學生の文章を見るに、其華やかなるあり、其壯んなるはあり、併し乍ら其論理的正確を得て居るものは極て少ない。否な斯の如きは獨り學生間のみでない、堂々たる天下の操觚者にして猶且つ吾人の滿足を値し得る程に正確なる文章を書き得るものは誠に少いのである。文章の要訣が醇爛華麗などいふことにありしは三四世紀の昔のことである。當今の文章は斷じて正確といふことを以て第一義とせねばならぬと思ふ。

當今の學生が、多く正確な文章を書き得ぬに就ては、教育家の方面にも大に責任があると思ふ。一體正確なる文章は、最新の科學的、組織的見識

あるものでなければ作れぬことは疑ない。故に作文の教師としては最も進歩したる科學的識見を有する者でなければならぬのに、見よ、現今の作文の教師なるものは、殆んど例外なく、舊式に和漢文をいぢくる天保的腐儒的陋漢のみではないか。舊式の漢學者や國學者は現今の活世界の活文章を教ふる資格塵ほどもあるべき理がない。寧ろ彼等よりは數學者の方が作文の教師として適當かもしれぬ。兎に角現今の初等中等の教育に於ける作文の教授法は、大に面目を一新するの必要があると思ふ。

(七)

次に答案ハ最モ樂ニ讀メル樣ニ書カヌヤ。如何に書けば最も樂に讀めるか。驗試官が最も樂に讀める樣に答案を書くには、如何なる條件を心得ねばならぬか。此質問に應ずる所の必要な る個條をば、答案の技術的條件といふのである。第一に決めねばならないのは、答案は鉛筆で書

くべきか、又は日本筆若しくは西洋ペンで書くべきかの問題である。鉛筆と日本筆と西洋ペンとの三者の何れで書くのが最も樂に讀ましむるか。是は重大なる問題である。輕卒に考ふべからざる問題である。予輩の所見に依れば、第一には日本筆を可とする、次には西洋ペン、鉛筆は斷然排斥すべきである。鉛筆はスレて消える憂がある、のみならず、色が薄くて見るに骨が折れる。西洋ペンは此憂はないけれども、細いだけに目の疲れることと日本筆と同日の談でない。故に技術的條件の第一義としては答案は日本筆で書くべきである。

次に縦に書くのが宜いか横に書くのが宜いかも極めておかねばならぬ。日本筆を採用するときは縦横何れにも出來るから、之れが問題となるのである。以前某しの博士は人間の目が横に着いて居るから横書が宜いと云はれたけれども、必ずしもさうでもあるまい。兎に角日本筆を用ふることに一

決した上はモー議論はない。縦書にする外はない。が西洋ペンであれば縦にすべきか、横にすべきか、一應豫め考へておくの必要があらう、最も數學の如き、始めより横書ならでは叶はぬ種類のものは格別である。

次は文字のことである。文字は須らく大なるを要する。字が小さくては樂に讀めぬ。又全體の主眼となる點と、細目の點とを分くるために、文字に大小の別を附し、又は行を別にし、且つ一字下げる等の工夫も必要であらう、事柄の變る度毎に、行を改むべきことは無論のことである。又假名は片假名が可なるか、平假名が可なるか。之も問題である。何れが讀み易かるべきかを深く考へてきめねばならぬ。又漢字は無論楷書で書くべきであつて、草書は全然避くべく、行書と雖も餘り好ましくはない、略字なども餘り用ゐぬを可とするのである。

以上の諸點に注意するなら、餘程樂に讀めるだ

らうと思ふ。猶讀者諸君の銘々更に細目に亘りて御工夫あらんことを希望するのである。

只終りに最も大切なる要點としては、文章の簡潔なるべきことである。冗漫の句があつては樂に讀めぬ。出來るだけ少時間の内に、早く讀める樣でなければならぬから、務めて餘計の文字を除き、用のある文字だけで早分かりのする樣に答案を作らねばならぬ。一體理想的の答案としては、一々書いてある文字を讀み辿らなくとも、一寸一目見た計りで合點のゆく樣なものでなければならぬ。一々讀なければ分らぬ樣なものでは駄目だ。今例を取りて云はんに能く市中などに轉居の廣告を張り付け居るものがある。之を見るに次の如く細々と書いてある。

私儀今般不得已都合有之何區何町何番地へ轉居致候間
左樣御承知被下度猶ほ御用の方は何卒右同所へ御光來被
下度郵便物も同所へ御配達奉願候

年月日

何の誰

なんとくどい讀みにくい廣告ではないか。第一に轉居として餘計な文字が多過ぎる。廣告は之を見る人に轉居の事實を知らせれば足るのである。見る人は如何の都合のために轉じたかを問ふ必要はない。轉居したのは不得已都合ありての事だ、などゝ辨解するのは無用である。又用のある者と郵便とは來るなと云はれても新住地に赴くにきまつて居る。「同所に御出で被下度」とか「御配達被下度」も全く無用の冗句である。吾輩ならば斯う書かんと欲する。

轉居

何町何番地へ

月　日

何の誰

簡單であるのみならず、頗る分りが宜い。凡て廣告は分りが早い樣に作らねばいかぬ。廣告の意匠の極意は即ちこゝに在る。答案も此點に於ては全く廣告と同樣である。答案も亦大に分りが早い樣

に意匠をこらさねばならないのである。

（八）

終りに**答案ハ最モ面白ク讀メル様ニ書カヲバナラヌ**。第一が正確で、第二が樂に讀めて、終りに面白く讀めるなら、之こそ理想的の答案と云つて宜からう。如何にしたならば面白く讀めるだらうか、此問題に答ふる所の個條を、吾人は**答案ノ審美的要件**と云ふのである。

答案の審美的要件は自ら二つの方面より之を充たすべきものである。言ひ換ふれば、面白く讀める様に答案を作らんが爲めには、二つの注意が肝要である。二つの注意とは何であるか。曰く思想の組立ての上の注意、曰く文章の上の注意。

面白く讀める答案としては先づ**云ヒ現サントスル所ノ思想其者ヲ面白ク組立テル事ニ苦心セヲバナラヌ**、例へばAから始めてBCに及び順次Zに至る正當の順序を追うのが面白いか。或はOPあたりより始めてZに及び更に一轉してAに遡る

のが面白いか。是皆塲合により て同じからざる事であらうが、答案を巧に書かうと思ふ者は、須らく其塲合々々により て此點に深き注意を拂ふべきであると思ふ。

最も數學の如きにありては、一より二、二より三といふ風に疊み上げて議論を進めて行くべきものであるから、矢張りAより正當にZに進むといふ順序方法に依らねばならぬ。併し歷史の如き記述的のものや、法學とか哲學とかの論理的のものやは、必ずしも數學の塲合の如く正當なる方法に依ることを要せぬものである。斯の如きものゝ塲合に於いては深く心を傾けて、如何なる順序に、我が思想を組み立つべきかを工夫することが必要である。

例へば歷史上の或事件を記述するに當り、大體先づ原因を說き、次に事實を述べ、最後に結果を示すといふのが正當の順序である。併し冒頭先づ結果を示し、次に斯かる結果は何により て生ぜし

やの原因に遡るといふ順序でやつても、必ずしも不都合ならざるのみならず、却つて此方が面白いと云ふ場合もあらう。殊に法學、哲學等の議論に至つては、同一の思想でも之を構或するの巧拙に依つて、大なる優劣を生ずるのである。如何いふ風に我が議論を進めて行くべきかの實質的方面の工夫は、決して忽にすべからざるものである。

之等の點に關して一つの參考となるのは、近時小説家の小説の書き振である。昔の馬琴一流の德川時代の小説を見ると、先づ誰れかの一代記とすれば、開卷第一に十代も廿代も以前の祖先の事を叙し、殊に祖父母父母の事歷に念を入れて述べ、夫れより本人の誕生、生ひ立ち、幼年の出來事より段々年代を追うて遂に死後の事までも述べると云ふのが普通の書き振りである。併し今の小説にコンナものは一つもない。第一に人の一代記といふが如き物は面倒くさくて當世には流行らないのみならず、假令かゝる書があつても、誕生から始

て死に至るといふ年代記的順序を取らぬ。イキナリ其人の面覚しい一生中の出來事から始め、其れも其人の面目を躍如たらしむる範圍に止め、其他の管々しい事は書かぬ。當世の小説家が小説を書くに、如何なる處より書き始めて、局面を如何に展開し行き、又如何に其收結をつけるかは、予輩の所謂審美的要件の如何なるものなるかを工夫するに、最も適切なる參考となるのである。

思想構成上の注意の外、審美的要件を充たすに必要なる他の一ケ條は文章上の注意である。前のは答案の實質を面白からしむる注意で、之れは其の形式を面白からしむる注意である。前者を審美的要件の實質的要素と云ふならば、之れは其の形式的要素といふて宜い。

即ち文章上の注意とは**文章ガ面白ク出來ル様ニ工夫スルコト**をいふのである。思想の組み立てが面白くとも、之に伴つて文章も面白くなくては、完璧とは云へぬのである。但し如何云ふ風に書け

ば文章は面白く出來るかは、一々細目を擧げて詳述することは出來ぬ。之は大部分、銘々の文才に待つの外はない。只一二の例を云へば、「云々なり」とするよりも「云々にあらずや」と云ふ方が宜いとか、又たは「之れ愚論なり」といふよりも、「天下豈亦斯の如き愚論あらんや」と云ふ方を採るとか云ふ如きである。要するに所謂修辭學の原則に從ふと云ふことに外ならない。

只此場合に注意すべきは。餘りに文章のことに注意し過ぎて、即ち修辭學の原則に賴り過ぐるの結果として、かの論理的要件即ち「正確」と云ふことを破りては成らぬ事である。兎角「正確」といふことと「面白さ」と云ふことは兩立し難いものである。之れを主とすれば彼を多少傷くるの恐れがあり、又彼を主とすれば之れが達せられないと云ふ樣なことがある。故に修辭學の原則に從ふと云ふても、實は答案に最も必要なのは其論理的要件であるから、答案は先づ「正確」を第一に尙び、此「正

確」といふことに悖らぬ範圍に於いて、修辭に心を傾くべしと云ふことに解せねばならぬ。

(九)

要するに或は論理的條件といひ、或は技術的條件といひ、或は審美的條件といひ、別々に必要條件を列擧したが、實際の場合に當りては往々彼と此と矛盾することも少からずあるだらう。斯かる場合には受驗者は能く取捨判斷をして、折衷調和せしめねばならぬ。

試驗に成功せんと思ふ者は、論理的、技術的、審美的の三要件を具備したる答案を作らねばならぬことは以上述べた通りである、而して斯かる三要件を具備したる安全なる答案を作るには、第一には平素より心掛けをなし、此三要件の實際の適用をば、ふだんから緻密に工夫することが肝要であること勿論であるが、其上試驗場に於ても、少時間の工夫の勞を吝んではならぬ。能く試驗場に入りて問題を見ると直ちに筆を取る人があるが、

アレでは旨い答案の出来る筈はない。

我輩の經驗に依れば、若し一課目二時間の試驗だとすれば始めの三十分間は全く筆を取らぬ。沈思默考して、此云々の問題に對する答案を書くに以上の三要件を如何に適用すべきかを深く工夫するのである。技術的要件中日本筆にすべきや否や等は試驗場に入らぬ前より決められてあるべきものだが、試驗場に入りて問題を見てからは先づ之に對する自分の智識を呼び起し、之を如何なる

文字に現はすべきか、又その智識思想を如何に組み立て、如何に現はすべきかの論理的審美的要件に就いて工夫し、此工夫が終りてから始めて筆を取るのである。即ち此の工夫の爲めに二時間の中三十分を割愛するのが最も適當であらうと思ふ。而して三十分を經過したならば初めて筆を取り、かの技術的要件を心に深くとゞめつゝ、聊かも澁滯なく一瀉千里の勢で、一時間内に書き退けるのである。筆を取りてから途中で澁りてはならぬ、

三十分の工夫は實に途中で筆を濫ることなからしむる爲めである。一時間内で書き終れといふのは、最終の三十分は「讀ミ直シ」のために用いんとするからである。この讀み直しといふことは最も必要である。答案は最も少き字數で最も豐富なる内容を書き表はすものだから、只一二字の誤脫も全體の意味を損害すること、實に甚しいものである。折角骨折りたる甲斐もなく、僅々一二字の誤脫のため、著しき誤解と損害とを招ぐ樣では、此上もない遺憾の事なるが故に、愼重なる學生は、特に最後の三十分を、喜んで「讀み直し」の爲めに捧げねばならぬのである。

斯くの如く、予輩の所信を明白に申せば、直ちに筆を取つてはならぬ。又所定の時間の終るまで筆を止めずに居つてもいけぬ。前後三十分づゝ即ち一時間を工夫と讀み直しのために割愛せねばならぬ。即ち筆を動かすのは全時間の半分だけにして、他の半分は工夫と讀み直しとのために前後に

配置せんと欲するのである。

斯く論じて來ると、其當然の結論として、凡ての問題は全時間の半分で以て、皆答へねばならぬ他の半分の時間は、工夫と讀み直しとの爲めに取らるゝのであるから、五問題あるなら、其五問題悉く、半分の時間内で答へなければならぬ。即ち二時間内で答ふるために五問題を出されたときに、予輩は一時間内で悉く五問題の答案を書けといふのである。一寸見ると、如何にも無理のやうであるが、決してさうでない。何となれば前にも申した通り、答案は頗る簡潔なるを巧とする、上乗とするものであるから、此點を深く呑み込めば字數は極めて少くて濟むのである。優等なる答案ほど字數は餘り多からぬ筈である。此點を能く呑み込まず、餘計の文字を幷べて無用に字數を多くするからこそ、無理だなどゝ思ふだらうけれど、予輩より見れば、一時間内で凡ての問題に答ふることは、左程困難なる事でないのみならず、又一

時間内ですべて答へられる程に簡潔でなければ、いかぬと思ふのである。但し寫字が遲く、且つ豐富なる内容を簡潔なる文字に現すの技能に乏しきものは、或は少しく無理と感ずるだらうけれども之れとても前後に工夫と讀み直しとの時間を割かぬ譯には行かぬ。斯かる人は平素習字と文章とを練習して、イザと云ふ場合に狼狽せぬ樣に心掛けねばならぬ。文章は左程でもないが、現今の學生が習字を輕蔑するのは、甚だしき謬見である。

試驗に失策するのは、固より能く理解せぬ爲めであることが多いが、中には、能く理解して居りながら、ムザ〳〵劣等の成績を得て居るものも少くない。能く理解して居りながら失策するのはツマリ發表の原則、殊に上述の時間の配置等に、心を傾けぬからであらうと思ふ。彼等は發展の原則につき、細密なる工夫を積まぬから、試驗場に於て半分の時間内で十分答案が書けると云ふ確信がない、否十半分の時間内で書き終へねばならぬと

云ふことに氣が及ばない。只々何んとなく時間が足りないやうな氣がして、心に落付がない。始より一種の鬼氣に襲れたかの如ぎ感がして、多少狼狽の氣味がある者だから、問題を見るや否や、工夫も何もあらばこそ、早遑として筆を執り、ダラ〳〵と用の無い事まで書いて行く。段々時間が迫つて來ると、益々狼狽し、顏が火のやうになりて筆は思ふ樣に進まず、字ばかり愈汚なくなつて、ヤツト時間の終ると共に書き上げ、讀み返しも何もせずに試驗官に出すのである。コンナ風では如何して立派な答案が出來るだらうか。彼は折角見事に理解し得たりしに拘らず、工夫の功を積まず確信と安心とが無かつた爲めに、斯くして試驗に失敗するのである。

(十)

予は、前段に於いて、折角能く理解して居つても、發表の原則に工夫を怠れば、試驗に成功することは到底出來ぬものなることを述べた。是に於

いて人或は予輩を難じて曰ふであらう、汝のいふことは學生の實力には關係せぬではないか。實力さへあれば發表の方法が惡くて試驗に失敗しても憂ふるに足らぬではないかと、此非難は一應最もである。

要するに、吾人の求むるものは實力である。實力とは即ち本當に能く理解して居ることであるから、能く理解して居るなら、發表の方法が下手でも憂ふるに、足らぬ樣であるが、能く考ふると之れは皮想の見である。

理解の原則と、發表の原則と、二つに分けて說明したけれども、此二者の基く所は銘々の判斷力にあることで、源が二つでない。故に能く理解し得る者は、必ずや能く發表し得る筈で、能く發表し得る者は、必ず能く理解した者と見て誤がない、能く理解せざればこそ能く發表し得ざりしなれ。發表に拙なるものは必ず理解も十分でないことは大體明である。故に本當の實力は、發表に拙なる

者に之を許すことは出來ぬ。

假りに百歩を讓りて、所謂實力は、發表の方法に關係なくして存し得るとしても、發表せられざる實力は、磨きの粗なる玉のやうなもので、我が實力を適當に紹介する所以でない。試驗成功術の一要素としては發表の方法は最も肝要である。獨り試驗のことのみでない。發表の方法は即ち我が實力を世に紹介する所以であるから、試驗に於ける發表法に拙なる程の者は、結局我が力を社會の用に供することの下手なる者となる。即ち社會有用の材たるの資格に缺くる所あるものと云はねばならぬ。何となれば此れも彼も其基く所は常識的判斷力といふてとにあるからである。

予が此蕪雜なる一篇は、總べての學生諸君の一讀を乞ひ、其活用を希ふのであるが、殊に予輩は今や中學を卒へ、將に高等諸學校の入學試驗を受けんとしつゝある諸君の熟考を煩したいのである。高等諸學校の入學試驗には、近年其應募者極

めて多數である。二三百人の募集に對して千人も二千人も應募者があるといふ有樣である。其間にありて競爭して勝を占めんと欲せば、是非予輩の試驗成功談に耳を傾け給ふ必要はあると思ふ。

且つ入學試驗にありては、受驗者と試驗官と全く相見知らぬ者であるから、普通の場合と異り、其姓名に依りて其學力を知ることを得ぬ。普通の學校では、教員は平生の授業により、誰れの學力は此位といふ見込が、始めより付いて居るから、

答案を見るときにも、矢張り此考が抜けぬ。從つて多少斟酌の餘地もあるだらうと思るゝが、之に反して入學試驗にありては、試驗官は全然一片の答案に依るの外、受驗者の實力を知るの材料がない、答案が即ち唯一の材料であるから、吾々は最も發表の原則、即ち答案の書き方に注意せねばならぬ。

答案の第一義は、勿論論理的要件に存することは疑はないので、他の要件は寧ろ第二位第三位に

ある筈であるけれども、入學試驗などの場合には、第二位第三位たるべき技術的審美的要件が、實際上第一位に必要なるものとなつて來るのである。何故であるか。

今實例に依りて說明するに、每年高等學校の入學試驗に應ずる者は、詳細には分らぬが少くとも三千人を下ることはあるまい。從つて各試驗官は少くとも三千通の答案を見て點を付けねばならぬ。而して三千通の答案を見るにどれだけの時間

があるかといふに、凡そ十日である。然らば試驗官は毎日三百通の答案を見ねばならぬ。丁度期節は七月の末暑さの最も烈しき時である。此酷暑の候に試驗官は毎日幾時間働けるだらうか。大抵五時間位しかやれぬとのことであるが、果して然りとすれば、彼は毎日一時間毎に六十通の答案を見ねばならぬ。即ち一分間に一通の割合である。一通の答案は幾枚の紙數あるだろうか。兎に角一通一分とは殆んど不可能であるやうだが、實際試驗

官は此速力で審査して行くのである。然らば吾人は玆に深く思はざるを得ぬ。此入學試驗に最も適して居る答案は。一分間で能く了解さるゝ、樣な答案である。即ち一分間で以て優に且面白く受驗者の思想が理解せらるゝ樣な答案であるに相違ない。予は決して試驗官の公明を疑ふのではないが私かに察するに、字の拙い、下手な、分明しないものや、文章の分りにくい、管々しいものや、又は餘りに長々しい答案などは、始めより試驗官の

目に入らず、恐らく直ちに紙屑籠の中に投げ入れられるではあるまいか。事實上斯かる種類のものまでも丁寧に見て居つては、到底短時日の間に、數多き答案を審査し終ることの出來る理由がないのである。

加之時は酷暑の盛夏、人は函根熱海など、避暑に出掛くる時に當り、拙い答案を以て、紅塵萬丈の帝都に忙しき試驗官を尙更苦めるのは、餘り心ない仕業だと思ふ。予は字體の明了な、議論の正

確な、文章の簡潔な、萬事目醒むるばかり、生々した答案を呈するのを以て、啻に試驗に自己の成功ずる所以たるのみならず、又以て試驗官を慰むる道德的義務なることを信ずるものである。

以上は入學試驗の場合に付いて一言したいのであるが、之は入學試驗に限るのでは固よりない。如何なる試驗に在りても予の長々と述べたる幾多の注意は、其成功の必要條件たるを失はぬ。只斯かる要件の効力は、受驗者の數が多ければ多い程、

大なのである。入學試驗でなくとも試驗を受くる者の數が非常に多いときには、予輩の成功術は著しく其効を奏することを疑はない。

（十一）

予は前段を以て試驗成功術の概要を一應說明し終つたのである。今此篇を結ぶに當つて尙讀者諸君に一言したい事がある。

それは外でもない。之れまで予の述べたる所は悉く予自らの實驗の談話であるといふ事である。

人から聞いたり、本に書いてあるのを見たりして、ソレを受賣りするのではない。一寸見ると、或は論理的要件だとか、或は審美的要件だとか、細密なる分類をした所の工合、西洋の本の飜譯でもありさうに思ふ人もあらうが、決してさうでない。悉く予一己の實驗に基き、予の實際に行へる所、工夫せる所を組織立て、説明したまでゞある。すべて實驗といふものは、具體的のものである けれども、之を精密に説明するとなると、どうも

抽象的に流るゝものである。讀者よ、此抽象的なる記事を讀んで、空に記憶するのみでは何の役にも立たぬ。能く之を玩味し、更に工夫して、根本の精神を體得して、自分の身に付ける實際の力とせねばならぬ。この試驗成功術を一讀すれば、直ちに試驗に成功するものと思ふは大なる謬りである。之れは根本の原則に過ぎぬから、此の原則を深く痛切に我が心の中に藏め、更らに自分で色々に細密なる工夫をなし、且つ屢々之を實地に試み

るに非ざれば成功は期し難いのである。予の述べたる所は暗示に過ぎぬ、ヒントに過ぎぬ。之によりて讀者の用意を喚起し、更に大なる工夫を積んで、本當に試驗に成功するに至り給ふを得ば、予輩の滿足此上もないのである。

只折り返して言ふておくが、之れは予の實驗の結果の、多少組織的なる說述である。紙の上に書き現して見れば抽象的空論のやうであるけれども。予は斯くの如き原則により、斯くの如き工夫

を積んだ者である。而して之によりて多少の小成功をなし得た者であることをば、讀者の信用せられんことを希ふのである。予も亦之によりて更に一歩一歩を進むるならば、大抵の人は見事なる成功をなし得ることを信じて毫も疑はない。

モウ一つ言うておく事は、予は先年法科大學を卒業した者で、云はゞ法學生である。故に予の實驗は自ら法學の受驗に限られてある。高等校を卒業する迄は之等の點に深く心を注がなかつた。細

に工夫するに至つたのは、法科大學に這入つてからである。從つて予の試驗成功術は或は法學（其他論理的學問）の書生に偏して居るかも知れぬ。自分では勉めて他の學問の人のためにもと心がけたれども、若し多少偏して居る樣な事があらば、其點は切に讀者の斟酌を乞ふのである。

序に法科大學の試驗に關する予の觀察を述べやう。世間では法科大學に落第生の多いのを見て、試驗が酷に過ぐるといふ。予は斷じてさう思はな

い。第一に問題は實際餘りに容易過ぐる。十中八九は之が堂々たる法科大學の試驗問題であると人に見せるも恥かしい程、平凡簡短なる問題のみである。どう考へてもコンナ問題では落第され樣がないと思はるゝが多い。然るに實際落第する者の意外に多い譯は、主として（一）平素の怠惰（二）理解の方法をあやまり、要點をつかむと云ふことが出來ぬこと（三）法科の試驗は六かしいといふ世間の俗說に惑はされて、小心翼々となり、試驗場に

於ても心に餘裕なきこと(四)發表の原則其宜しきを得ざることの四原因に基くものと思ふ。

教師の採點は概して極めて寬大であることも事實である。只學生に這般の工夫が足りないのである。近年落第生は餘程其數を減じた樣だけれども之は學生の實力が增した爲めでも又學校の試驗問題が特別に容易くなつた爲めでもない、只教師の採點が寬大になつた爲めなので學生の實力は依然として舊の如しだと思ふ。採點寬大なれば從つ

答案を見るときにも、矢張り此考が拔けぬ。從つて多少斟酌の餘地もあるだらうと思るゝが、之に反して入學試驗にありては、試驗官は全然一片の答案に依るの外、受驗者の實力を知るの材料がない、答案が即ち唯一の材料であるから、吾々は最も發表の原則、即ち答案の書き方に注意せねばならぬ。

答案の第一義は、勿論論理的要件に存することは疑はないので、他の要件は寧ろ第二位第三位に

於ても心に餘裕なきこと（四）發表の原則其宜しきを得ざることの四原因に基くものと思ふ。

教師の採點は概して極めて寬大であることも事實である。只學生に這般の工夫が足りないのである。近年落第生は餘程其數を減じた樣だけれども之は學生の實力が增した爲めでも又學校の試驗問題が特別に容易くなつた爲めでもない、只教師の採點が寬大になつた爲めなので學生の實力は依然として舊の如しだと思ふ。採點寬大なれば從つ

て實力の不十分な者までも卒業生として世間に出ることゝなる。是れ近時大學卒業生の聲價の減じたる所以ではあるまいか。要するに學生を萬事獨立の工夫を爲す樣に教育して行かぬのは或は學校の罪であるかも知れぬ。けれども法科大學に落第生の多いのは、予輩の觀察に依れば　其責多く學生に在りて、學校には少いと思ふのである。法科大學の學生諸君はモツト自由豁達なる頭腦とならねば　世間の批難は結局打ち消すことは出來ぬと

思ふ。

試驗成功法

終

不許複製

明治三十九年九月十八日印刷　試驗成功法奥附
明治三十九年九月廿二日發行　正價金貳拾錢　郵稅金四錢

編輯兼發行者　東京市神田區今川小路三丁目二番地　宮城伊兵衛
印刷者　東京市神田區仲猿樂町四番地　藤澤外吉
印刷所　東京市神田區今川小路三丁目二番地　秀光社
發行所　東京市日本橋區油通町十八番地　昭文舍
大賣捌元　東京市神田區表神保町二番地　水野書店
大賣捌元　東京　東京堂